

## アートフェチ、その貪欲な名前の裏側に

藤田千彩(アートライター/東京在住)

「2000年代のアートシーンを振り返る」。来年の年末、そんなテーマで私は某雑誌に記事を書くよう求められる(だろう)。アートマーケットの拡大?ポスト奈良・村上はまだ見つからない?うーん、何について書こう?ぼらぼらと、この10年間に見た展覧会のDMをストックしているファイルをめくる。そこで目に留まる「ギャラリーアートフェチ」の封筒。アートマーケット至上主義だった2000年代のアートシーンにそぐわない彼らの活動は、正直言って誰が触れ、残されていくのだろうか。

21世紀に入ってしばらく経ったころ、名古屋にギャラリーアートフェチなるものが出来たと聞いた。パソコンもだいぶ普及し、当時の私が書いていたweb日記には「名古屋の美大生たちによるスペースらしく若さ爆発絵画展だった」とある。1974年生まれの私と同世代である、N-markの武藤氏と「名前のつけかたが、既に世代の違いを感じるよね」という会話をした記憶がある。そのくらい私には他人事であり、ギャップを感じるものだった。

しかもあろうことか「ギャラリーアートフェチ」という単語は、アダルトビデオショップの階上にある展示スペースを意味するだけではなかった。おそらく今世紀最後とも言えるアーティスト集団でもあったのだ。元来アーティストが集団化する理由は、個々の力を寄せ集めるという目的だった。シュルレアリスムの作家、具体の活動、みたいな使い方、アートグループ(ユニット)は成立していた。ところが2000年代は個の時代である。自民党で

さえ「個人の代議士の発言に振り回されて、集団としての自民党とは何なのか?」と自問する現在、世の中あらゆるものが個人個人のモチベーションで計られている。ギャラリーアートフェチにはそういった自覚がなかったようだ。「同世代の作家だったので、いい刺激になっていた」、「ライバル=敵対視と考えるとそこまで意識していない」、チョーびっくりである。友達つながりみたいな感覚で、アートグループを形成していたのだ。

アダルトビデオショップの上から、大須のはずれにあるビル、そして犬山。愛知をひっかきまわすようにスペースは引っ越し、メンバーを中心に個展、グループ展といった展覧会を開催していた。ギャラリーアートフェチ、という貪欲に聞こえる名前は、「2000年代」and「名古屋のアート」、そんなキーワードでしかgoogleに引っかからないモノ(コト)でいいのだろうか?もっと名古屋のアートシーンをなんとかしたいと思わなかったのだろうか?

私はギャラリーアートフェチに聞いた。いい。

「なぜ集団である必要があったのか」

「なぜ集団でありながら、大きなことを企まなかったのか」

その答えを誰も聞かないまま、ギャラリーアートフェチは自分の首に手をかけた。歴史も伝説もつくることもしないまま……。